様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　5 日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：20520221
研究課題名（和文）
ヴィクトリア朝文学に見られるイジメの社会的および心理的文脈の研究
研究課題名（A Study of the Social and Psychological Contexts of Bullying in Victorian Literature）
研究代表者
松岡　光治（Mitsuharu MATSUOKA）
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：70181708

研究成果の概要（和文）：
本研究では、ヴィクトリア朝の文学テクスト――主にディケンズ、ギャスケル、ギッシングの小説――を一次資料とし、そこで明示的／暗示的に描写されたイジメの場面に焦点を定め、19 世紀イギリスの時代精神と社会風潮の影響を受けた人間のイジメという言動の法則性を突き止め、そうしたイジメの言説を表出させている社会的および心理的文脈を解明した。

研究成果の概要（英文）：
With the works of Dickens, Gaskell, and Gissing as its primary source materials, this research addressed the issue of bullying explicitly/implicitly described in them. By so doing, it established the verbal and behavioral patterns of bullying influenced by the Victorian mindset and clarified the way in which the social and psychological contexts of the age sustained bullying.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：英文学
科研費の分科・細目：文学、英米、英語圏文学
キーワード：ヴィクトリア朝文学、イジメ、ディケンズ、ギャスケル、ギッシング

１．研究開始当初の背景

価値と規範の体系が天皇――精神的権威と政治的権力の独占者で究極的価値たる天皇――への相対的な近接の意識に基づいて成立していた戦時下の日本では、自分に対する主体的責任がないために、上から受けた抑圧を下へ譲り渡すことによって精神の均衡が保たれていたと、政治思想史家・丸山眞男は「超国家主義の論理と心理」(1946) の中で述べている。国家と時代は異なるものの、こうした「抑圧の移譲による精神的均衡の保持」は、女王を頂点としたピラミッド型社会の厳格な階級制度と家父長制度に支配され、ラマルクやダーウィンの自然淘汰による進化学説によって社会制度としてのキリスト教の基盤が脆弱化していたヴィクトリア朝でも、強者による弱者への様々な形のイジメを通して現れていた。社会組織とその構成員が自己存続を求めて行う「抑圧の移譲」という丸山の概念は、イジメの原因と温床構造を探るのに極めて有効なコンセプトとなり得るが、もちろん全部の問題に対応できるわけ

ではない。

研究代表者が専門としているヴィクトリア朝の作家たち――主にディケンズ、ギャスケル、ギッシング――は、自然科学の発達や科学技術の発明がもたらした新しい価値観の影響下で変貌する当時の社会と文化を冷徹な眼差しで観察し、そうした変化にもかかわらず大半の人々の改善されない、むしろ悪化している内面世界の真相を読者に提示している。実際に、これらの小説家たちは社会的な諸問題を自然主義的なリアリズムの立場で赤裸々に描いてみせ、主要人物たちが事大主義に陥って自己保存のために強大なものに従いながら犯しているイジメという作為の罪、そして他者のイジメを放置している無作為の罪を作品の中で諷刺している。そうした病んだ社会における個人の内面世界で展開されるイジメのメカニズムを分析するには、「抑圧の移譲」に加えて、従来とは異なった観点、発想、手法のために学際的なアプローチを取ることが肝要である。

研究代表者は社会学と心理学を中心に据えた隣接領域の方法論と研究成果を統合した学際的視座に立ち、平成 17～19 年度科研費補助金基盤研究 (C) の「ヴィクトリア朝文学における都市生活者の狂気：その社会的および心理的文脈の解明」で、イギリス近代の文明社会が人間に強いた疎外感の結果として生じる狂気について文学テクストを通して分析したが、その一環としてディケンズ・フェロウシップ日本支部の学会誌の第 30 号（2007）に「ディケンズの作品におけるイジメの問題」を寄稿し、本研究を進める上での準備作業を済ませていた。

イジメに関する国内の書籍や評論は枚挙に暇がないが、そのほとんどは教育現場を対象としたものであり、緻密かつ理論的に分析した国内の研究書は、個人の資質よりも中間集団全体主義という環境を重視した内藤朝雄の『いじめの社会理論――その生態学的秩序の生成と解体』（柏書房、2001）だけであった。また、海外でも状況は同じで、イジメや校内暴力対策の本やパンフレットは無数にあるものの、学術的研究の書籍や論文は極めて少ない。特にヴィクトリア朝研究の分野においては皆無の状態であり、本研究が対象とする課題の大半は未開発の段階に留まっていた。従って、ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮という文脈の中でイジメの原因と温床構造を分析することによって、現代の日本社会におけるイジメ問題を解決するための糸口となる示唆的で意義のある結果を導き出せると考えた次第である。

２．研究の目的

本研究では、ヴィクトリア朝の文学テクストにおいて明示的／暗示的に描写されたイジメに関する言説を中心に、当時の非文学領域の文献や主要ジャーナルに見られるイジメの言説を並行して分析した。この分析の主たる目的は、産業革命後の急激なパラダイムシフトの中で、ヴィクトリア朝のジェンダー・階級・人種のヒエラルキーにおいて、強者が弱者に対して意識的／無意識的にとってしまうイジメという行動の正確な社会的および心理的文脈を解明し、日本社会の刻下の喫緊事である自殺問題の予防・対策に寄与することであった。

日本の場合、イジメ問題は学校という領域に限定して論じられることが多いが、学校が社会の縮図であることを考えると、これは社会全体の病弊として捉える必要がある。実際問題として、職場では様々な形のハラスメントとしてイジメが存在するし、最近では匿名性を利用したサイバー・イジメが大きな社会問題となっている。しかし、イジメの温床構造を精査し、その原因を解き明かすには、日本国内のイジメの現象を微視的な立場で分析するだけでは不十分である。同じイジメ問題を抱えている先進諸国との通時的かつ共時的な比較検討を学際的に行わなければ、この問題の解決策はどれも単なる姑息療法に堕してしまう。

日本の現代社会におけるイジメは、戦後の日本が先進諸国に追いつけ追い越せの競争原理で猪突猛進し、その抑圧によって蓄積された心理的な歪みが発現したものであり、昔のイジメとは性質が異なっている。戦後の日本とヴィクトリア朝の英国を比較するのは奇異に思えるかも知れないが、我々は日本が百年ほど遅れて英国と同じ轍を踏んでいるという事実に目を向けなければならない。実際、戦後の急速な工業化と都市化を経てからバブル景気を通して平成の大不況に突入した日本人は、産業革命後の鉄道・汽船による交通革命を経て「世界の工場」として経済と金融をグローバルに牛耳った大好況期のあとで、新興国のドイツとアメリカの工業化によって大不況に陥ったヴィクトリア朝の人々と同じ社会問題を幾つも抱えている。イジメをそうした社会問題から派生した複雑な心理的副産物として捉えるならば、ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮という文脈の中でイジメの原因と温床構造を分析することによって、現代の日本社会におけるイジメ問題を解決するための糸口となる示唆的で意義のある結果を導き出せるはずである。本研究の最終的な目的は、そうした分析結果をイジメに関する研究分野の進展に貢献させることである。

３．研究の方法

本研究では、ヴィクトリア朝文学に見られるイジメの問題を照射し、イジメは産業革命後の時代精神と社会風潮（例えば、社会ダーウィニズム的な世界観）が人間およびその集団に強いる抑圧の結果として生じた現象であるという大きな仮説を立て、階級、人種、ジェンダー、産業、地域、環境、世代、教育、言語、情報など、権力が偏りやすい非合理的な社会構造を理論的アプローチと実践的アプローチの両面から分析することによって、この仮説を実証することにした。

そのための下準備として、ワークステーションのデータベースを充実させるべく、英語能力とコンピュータ操作に優れた大学院生数名の補助を得て、ヴィクトリア朝文学の電子テクスト化を推進し、ウェブ上のパブリック・ドメインにあるヴィクトリア朝関係の電子テクストを（マイナーな作品を中心に）できるだけ多く収集した。

同時に、ヴィクトリア朝の主要な文芸雑誌と新聞（*Household Words, All the Year Round, Bentley's Miscellany, Frazer's Magazine, Punch, Gentleman's Magazine, Penny Illustrated Paper, The Illustrated London News, The Illustrated Police News, The Daily Graphic, The Daily Mail* など）やヴィクトリア朝の政治・経済・医療関連図書に見られるイジメを扱った記事、そして社会心理学のイジメについての最新の研究成果を踏まえ、ヴィクトリア朝の人々の考え方や習俗などの根底にあるエートスが、どのような文脈で彼らのイジメを助長しているかを考察した。

しかし、いかなる理論の正しさもテクストの主観的・直感的な読みだけでは検証できないので、ディケンズ、ギャスケル、ギッシングを含めたヴィクトリア朝の作家の電子テクストを使い、研究代表者が独自に開発してウェブ上に置いたハイパー・コンコーダンス http://victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/ によって得たイジメの言説を精読した。そして、その文化的および心理的文脈の内的な構造と外的な関連性を解き明かすことで、傍証を固めながら上記の仮説の実証を試みることにした。

上記の仮説を実証したあと、個人と集団のイジメに関して次のような結論に至った。第一に、厳格な階級制度と家父長制度における個人的なイジメには、自分の劣等性を認識することの不快や苦痛を避けるために、それを他者である社会的弱者に投影し、外的なものとして処理しようとする心的メカニズムが働いていた。第二に、集団的なイジメには、プロレタリアートに対するブルジョアジーの階級的なイジメ、労働組合の組合員たちによる非組合員への（日本の学校ではお馴染みの）シカトという陰湿なイジメ、革命や暴動による下克上での意趣返し的なイジメなどが見られるが、そうしたイジメは自分の劣等性を意識せずに済むように自分を集団と同一視することによる自我安定のための無意識的戦略に他ならないことが判明した。

４．研究成果

平成 21 年度は、ヴィクトリア朝の階級社会におけるイジメの問題が、産業革命後の時代精神と社会風潮によって人間およびその集団が強いられた抑圧の結果であるという仮説を立て、その実証をギャスケルの作品を中心に行った。産業革命の揺籃期に『諸国民の富』を出版したアダム・スミスの理論に従い、自由競争の市場経済だけに財の再分配を任せていると、〈収穫逓増の法則〉が働いて富める者がますます豊かに、貧しい者がますます貧困に陥るという流れができ、産業構造がディズレイリのいう「二つの国民」の間で固定化されてしまう。ここにこそ政府の介入を排したレッセ・フェールの最大の問題点がある。このイデオロギーは、自助努力だけでは最低限の生活さえできない労働者の貧困問題を自己責任において克服すべき個人的な問題へとすり替えてしまい、それが本来は社会的な問題であることを隠蔽したのである。このように弱者の自己責任を強調する自由放任主義は、社会的な強者自身が意識的（あるいは自己欺瞞的）に犯している道徳的な〈不作為の罪〉を不問に付すための格好の口実となっており、そのことをギャスケルは一連の社会問題小説で批判している。しかし、彼女は社会に悲観して被支配階級の労働者たちと大同団結し、旧約聖書が教える〈目には目を〉という同害報復法によって、時にはそれ以上の超法規的な手段によって、冠履倒易を望む革命的な作家ではない。当時の社会システムが生み出した各種の問題に対して常に批判的ではあるが、その批判の矛先は国家の体制やイデオロギーそのものではなく、社会問題を放置している支配階級の人間性に向けられている。ヴィクトリア朝の中産階級の良識ある作家にとって、現体制の基盤であるレッセ・フェールは倫理的な問題を抱えていても、それが存在しないと大きな混乱を招くので許容しなければならない、いわば必要悪なのだ。従って、個人の利益追求の自由競争で社会全体が繁栄するという楽観的なレッセ・フェールから発生する〈イングランドの現状問題〉に対してギャスケルが提示できる解決策は、同じように楽観的なキリスト教的干渉主義や父親的温情主義に即したものにならざるを得ないのである。この研究成果を「レッセ・フェール――楽観主義には楽観主義を」という論文にまとめ、他の 30 名の研究者の論文と J・ヒリス・ミラー氏の巻頭言と一緒に編集し、平成 22 年度科学研究

費補助金（研究成果公開促進費）を得て出版したのが、『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』（渓水社）である。

平成 22 年度はヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮の底流をなしていた狂気のエートスとディケンズ文学におけるイジメの問題を考察した。狂気の問題は誰が誰を狂気と見なすのかという視点、そして権力の問題と密接にかかわってくる。階層秩序的に言えば、理性と同一視される支配者の言説や秩序を支えるイデオロギーが、抑圧や排除というイジメの形で被支配者を狂気に駆り立てる。ディケンズが描く狂気はポオが扱っているような精神異常そのものではなく、常軌を逸して人間を抑圧しようとする社会や、そうした社会を支える人物の異常な精神構造のメタファーとして提示される。そこで見逃してならないのは、芸術家や発明家と紙一重の存在として描かれる狂気や白痴の登場人物が、理性を標榜する権力側のイジメによって抑圧され、無能力者として周縁化されながらも、支配者の理性的言説や社会の権力主義的構造といった鼎の軽重を問う力を、その狂気と白痴という否定性の中に持たされていることである。この研究成果をまとめた英語論文 “Bedlam Revisited: Dickens and Notions of Madness” は 2011 年 5 月に国際雑誌 *The Dickensian* に採択され、2013 年に掲載されることが決まっている。

「抑圧の移譲」として行動化されるヴィクトリア朝の強者による弱者へイジメは、国内ではピラミッド型の段階構造を持つ階級社会における有産階級の無産階級に対する抑圧という形で見られる。一方、国外では植民地主義や帝国主義に支えられて海外の有色人種に対する暴力と略奪を正当化する差別という形でイジメが見られるが、そもそもコーカソイドの〈白〉はすべての色の可視光線が乱反射した時に人間が知覚する色だから、たとえ伝統的に善や正義のイメージが与えられて来たにせよ、彼らが〈黒〉のネグロイドや〈黄〉のモンゴロイドに付与した否定的属性を実際には自分たちも持っていたことになり、そこには当然ながら暴力性や残虐性も含まれていることになる。最大の問題は自分が理解できない他の人種の文化を狂気の沙汰と見なす植民地主義的な視点であり、実際には理解できない自分自身の劣等性を自分が無意識的に恐れている対象に投影することで、外的なものとして処理しているにすぎない。植民地主義であれ帝国主義であれ、文明化された中心の本国と文明化される野蛮な周縁の国々は、こうした二項対立的な価値観で分類できる一方で、文明の中心にも〈闇の奥〉としての野蛮な周縁が存在する。しかし、それは女性、労働者、有色人種といった弱者の味方として、彼らに対する暴力行為を忌避しながら作品で批判しているディケンズ自身に内在していたものではなかろうか。そのような仮説の実証を、研究代表者が主宰した平成 23 年のディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会でのシンポジウム「ディケンズと暴力」で、パネリストとして発表した「概説：抑圧された暴力」の一部で行い、その原稿を加筆・修正して書いた英語論文 “Dickens, Racism, and Chauvinistic Madness” が同学会の『年報』第 34 号（2012 年 3 月）に掲載された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

○ Mitsuharu Matsuoka. “Dickens, Racism, and Chauvinistic Madness.” *The Japan Branch Bulletin*. The Dickens Fellowship of Japan. No. 34 (March 2012): 45-51.（査読有）

○ Mitsuharu Matsuoka. “Slips of Memory and Strategies of Silence in *A Tale of Two Cities*.” *Nineteenth-Century Literature Criticism*. Farmington Hills, MI: Gale. Vol. 239 (May 2011): 108-12. （査読有）

○ 松岡光治「レッセ・フェール――楽観主義には楽観主義を」『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』（渓水社、2010 年 9 月）197-214. （査読有）

〔学会発表〕（計 1 件）

○ 松岡光治「概説：抑圧された暴力の行方」『ディケンズと暴力』（シンポジウム、司会・講師、ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会、2011 年 10 月 15 日、京都大学）

〔図書〕（計 4 件）

○ 松岡光治（編著）『ギャスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化――生誕二百年記念』（平成 22 年度科学研究費補助金［研究成果公開促進費］出版、渓水社、2010 年 9 月、xxxvi+684 頁）（査読有）

○ 松岡光治（共訳）エリザベス・ギャスケル著「異父兄弟」『涯（はて）』（「百年文庫」シリーズ第 22 巻、ポプラ社、2010 年 10 月）6-42. （査読無）

○ 松岡光治（共著）「リアリズム再考――ギャスケルはオースティンの娘か？」『生誕 200 年記念――エリザベス・ギャスケルとイギリス文学の伝統』（大阪教育図書、2010 年 09 月）11-21. （査読有）

○ 松岡光治（共訳）エリザベス・ギャスケル著「リビー・マーシュの三つの祭日」『ギャスケル全集・別巻Ⅰ（短編・ノンフィクション）』（日本ギャスケル協会監修、大阪教育図書、2008 年 9 月）45-72. （査読無）

〔その他〕
ホームページ等
○ 個人ホームページ
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/
○ The Victorian Studies Archive
http://victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/
○ ディケンズ・フェロウシップ日本支部
http://www.dickens.jp/
○ 日本ヴィクトリア朝文化研究学会
http://www.vssj.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
松岡光治（Mitsuharu MATSUOKA）
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：70181708

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし